

# 宮城を愛する歌手 さとう宗幸さん

ノスタルジックで人情味ある歌声が心に染み入る。宮城を代表する歌手のさとう宗幸さん。

夕方の顔としてキャスターを務めるテレビ番組では、物腰の柔らかささとユーモアで、老若男女に愛されている。そんな宗さんも、実はとみいず！エリアの住民。

ホームでのお気に入りの風景とともに、取材をさせてもらった。

## カメラの前でも等身大 自分に自分以上を求めない

宗さんのニックネームで県民から愛され、子どもや若い世代からは、宗じいじとも呼ばれているさとう宗幸さん。メインキャスターを務めるミヤギテレビの夕方ワイド番組「OH！バンデス」では、たびたびカメラに向けて、「じいじだよ」と気さくに声をかける場面も。放送開始から26年で孫がたくさんできたという、うれしそうに話す。

同番組では、常に等身大の自分という宗さん。そのため

やめたのが、本番前のVTRチェック。当初は良いことを言わなきゃと、放送予定のVTRをすべて確認し、あらかじめコメントを考えていた。でも、それを続けているうちに、自分らしくない、つまらないと感じて。

美しい景色に声を上げ、おいしそうな料理にため息を漏らしたかと思えば、リポーターに突っ込みを入れたり、スポーツの話にはつい熱が入ったり。おなじみの天真爛漫なコメントや素朴なリアクションは、放送中に初めて見た映像に対する、宗さんの率直な反応。それこ

う。「ただねえ、宗さん今日ゴルフに行ったなつて、スタッフや放送を見た友人にはわかるらしいんですよ」。日焼け肌での出演も「愛嬌」。

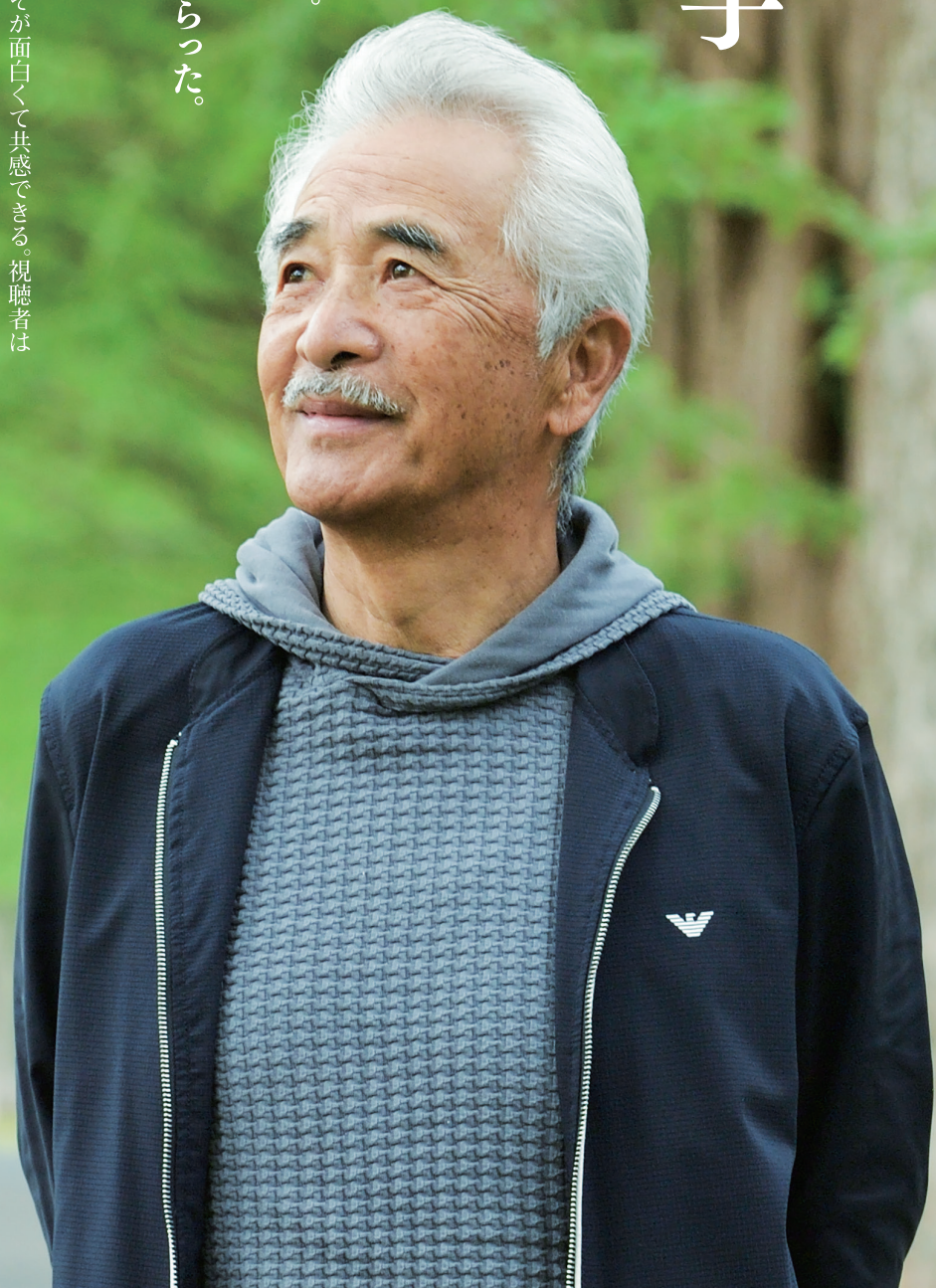
1981年の人気ドラマ「2年B組仙八先生」の撮影中にはこんなエピソードも。都内での撮影が終わった深夜、荒川土手から車を走らせて向かったのは、今回の取材場所でもある泉国際ゴルフ倶楽部。朝からゴルフをした後、仙台市泉区内の自宅で休日を過ごし、また東京へ戻る生活を毎週、一年間続けたというから、パワフルな人だ。宗さんの故郷愛とゴルフ好きは折り紙付きである。

「宮城は自然豊かな食材王国。物心両面でホッとでき、県内どこに行っても精神的な安堵感があります」。中でも40年暮らしている泉区とお隣の富谷市は、宗さんにとって最も自然の恩恵を感じられる場所。コロナ禍の今、改めてわがまちの魅力を強く感じているそうだ。

## 一生、歌手であり続けたい トレードマークに宿す決意

歌手としての原点は、かつて仙台駅前にあった歌声喫茶「若人」。歌声喫茶は客全員が歌う喫茶店で、リーダーが指揮をとり、店主がアコーディオンなどの楽器を演奏する。大学時代から同店でリーダーのアルバイトをしていた宗さん。卒業後は東京で就職したが、一年足らずで仙台へ戻り、リーダーに復帰した。

「歌声喫茶であの人すごいねっ



宗さんが泉区で好きな場所の一つ。泉国際ゴルフ倶楽部の敷地内にあるメタセコイアの並木道で

て褒められるのは、声の大きさ。歌手リーダーとしては、負けていけないわけですよ。どの客にも負けない声量で、毎日50曲を歌い上げることで3年。後にも先にもポイントレーニングは一度もしていないが、歌声喫茶での日々が自分を育ててくれた師匠だった。

「悪いけど俺、あの歌声喫茶の3年間で半端じゃないくらい声出してきたよつて、今も心の中に自負があるんですよ」。だから、70歳を越えた今も声を張って歌えるし、「OH！バンデス」を続けながらもステージに立てている。努力は裏切らない。名曲「青葉城恋唄」が生まれるまでは極貧生活。けなしの金で買った一枚のレコードが心の支えだった。フランスの歌手で、敬愛するジョルジュ・ムスタキのアルバムだ。出会った瞬間、ジャケットに写る彼の瞳に吸い込まれ、こんな思いが湧き上がってきた。「自分の道を信じ、歩き続けられたら本望だ。ムスタキのように、一生歌い続けたい」。

そのときの思いを忘れずに残しておきたいと、以来ムスタキをまねてひげを伸ばしている。「キザな言い方をすれば、決意のひげ。ひげなんて剃ってもまたすぐに伸びるけど、このひげには絶対に剃れない理由があるんですよ」。

1987年の大河ドラマ「独眼竜政宗」で演じた支倉常長は、ひげを生やした人物だからラッキーだった。もし、常長にひげがなくって、監督から剃ってくれと言われ

そが面白くて共感できる。視聴者は心を掴まれるのだ。

「調子が悪い日や乗らない日があつても、それも今日の自分だと受け入れる。毎日平均した自分を作れないし、自分以上のものを見せようとすれば、窮屈でやっつけられないと思うんですよ」。等身大でいることが、長続きの秘訣だと教えてくれた。

リハーサルの時間も短縮でき、「おかげで趣味のゴルフを楽しむ時間が増えた」とニヤリ。県内にはゴルフ場が多数あり、朝一番でスタートすれば、夕方の生放送まで間に合

ていたら。「泣く泣く出演を辞退しただろうね」と即答した。

「司会者でも役者でもなく、僕は歌手です」。その姿勢をかたくなに崩さない宗さんにとつての2021年は、「昨年に続いて、コロナ禍で本来の歌手活動ができない悔しい一年でした。ただ、こういう状況でも健康に過ごせたことはうれし

い」と、感謝も忘れない。テレビをつければ、宗さん。聞き慣れた声と屈託のない笑顔に、今年も毎日元気をもらった。来年は、宗さんの歌声を生で聴きたい。



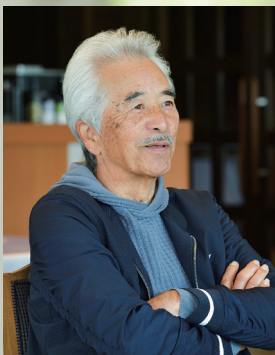
来年の抱負は、皆が安心できる状況でのコンサート開催。「生で歌を聴いてもらってこそが歌手だ」と話す



大ヒット曲「青葉城恋唄」で1978年にメジャーデビュー。杜の都・仙台を歌ったご当地ソングとしてもおなじみ



東日本大震災当時は、避難所を回って歌唱。その後も各地でのコンサートや復興支援イベントを継続的にを行い、被災地を勇気づけている



## 歌手 さとう宗幸さん

宮城県古川市（現、大崎市）出身。仙台市泉区在住。1949年1月25日、5人きょうだいの末っ子として生まれる。宮城のスターにふさわしい、伊達政宗と同じ「宗」を冠した名前は本名。姉を除く3人の兄も名前に宗が付く



取材時、「よろしくです」とカジュアルな装いで颯爽と現れた宗さん。愛用のゴルフクラブも見せてくれた